るつぼ談話室

（リレー寄稿　第３回）

繋がる話、繋がらない話

叶　　直樹
（化学科62期：1992年卒、星薬科大学薬学部・医薬品化学研究所）

前回の及川雅人さん（化学58期）からリレー寄稿第３回のバトンを受け取りました叶と申します。現在、東京都品川区にある私立薬科大学、星薬科大学で職を得ております。薬学系に馴染みのない方には聞きなれない大学名かもしれませんが、皆様はショートショートで有名なSF 作家の星新一はご存知でしょうか？実は、星新一は本学創始者の星一（ほしはじめ）の長男です。星新一は、星一が創立した製薬会社を引き継ぎ、後に本学の非常勤理事も務めました。ちなみに、星新一の「新一」はペンネームで、本名は「親一」です。星一の理念は「親切第一」で、ここから長男を「親一」と名付けたとのことです。私は、自分が中学生の頃に一生懸命読んでいた星新一と自分がこのような形で「繋がる」とは思ってもみませんでした。人生、何が起こるかわからないものです。

この原稿はコロナ禍の第７波のピークを超えた2022年８月下旬に書いています。この原稿が活字になる頃には、マスクが過去の遺物になっていて欲しいと願っていますが、新型コロナウイルス感染症がこんなに蔓延したのは、「繋がること」が人間の根幹だからではないかと思います。至近距離で面と向かってコミュニケーションを取るのが人間ですが、この感染症では、こんな普通のことをやった数日後に「あなたは感染しています。隔離です」と言われるのですから堪ったものではありません。

繋がりといえば、私の過ごした北海道大学は、人間関係が濃いところでした。学部時代は上下関係が厳しい体育会競技スキー部に所属していましたが、春から秋はスキーができないためほぼ陸上部＋筋トレ部と化し、空いた時間は部活の仲間とアルバイト、冬はスキーに明け暮れました。学部前半はこんな生活を送っていたため、成績はとても人に見せられるものではありませんでした。無機化学の横川敏雄先生から、「君は…こんな成績なんだったら…単位を放棄する位の気概を見せたらどうかね！」と怒鳴られたことを今でも鮮明に覚えています。

そんな私でしたが、村井章夫先生に有機化学第一講座に入れて頂いてからは、心を半分入れ換え、研究中心の生活を送りました。一方、いろいろなことをやらかしもしました。同期の大場裕一君（現中部大学教授）らと、研究室で研究材料のジャガイモをくり抜き、実験用（？）の油で素揚げにして、塩化ナトリウム（試薬特級）を振りかけて食べたりもしました。このあたりは日常茶飯事でしたが、大変な事をやらかした後には、その都度、村井先生や当時有機化学第二講座の宮下正昭先生に頭を下げに行ったものです。

ある日の研究室内での飲み会では、研究テーマ設定に関する議論が白熱して村井先生に食ってかかったこともあります。翌朝、前日の自分の無礼を思い返して、これはもう研究室に自分の席は無くなっているかも…と真っ青になり、おそるおそる研究室に行きましたが、村井先生はそんなことが無かったかのような顔をされていたのを覚えています。

約20年後の2018年の冬、今の大学に赴任する前に、村井先生のご自宅にご挨拶に伺った時、この時の話になりました。村井先生は私の無礼を全て覚えておられました。一方、当時の私を咎めることもせず、逆にいろいろな教え子の話をして下さいました。A は今、○○にいて元気にしている…B は○○にいて元気そうだ…C はいついつまでは連絡があったが、今はどうしているのか…D のことは今でも心配している…など…私は、村井先生の記憶の確かさに驚くと共に、今でも、メンターとしての立場に責任を持とうとされていることに感銘を受けました。学生時代は破天荒な先生という印象が強かったのですが、研究室を巣立って20年以上経った今は、研究指導だけではない、研究室主宰者としての在り方を教えられています。

村井章夫先生とススキノにて

2018年12月

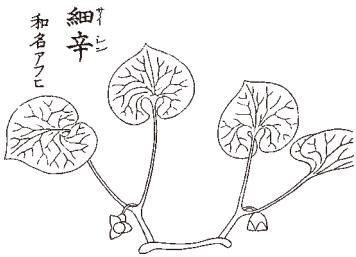
北大理学部化学科の繋がりは、いろいろなところに顔を出します。私は前職では東北大学に在籍しておりましたが、学内の重要プロジェクトに加わった時、メンバー４人のうち３人が北大理学部化学科 OB ということがありました。前川英己さん（化学56期、当時東北大学工学部准教授、故人）、西澤精一さん（化学61期、現 東北大学理学部教授）と私です。東北大の重要な仕事を北大 OB が任されているのを不思議に感じることもありましたが、もう一人のメンバーの方も北大卒と同じ香り（？）のする方だったこともあり、固く結束してやり遂げました。プロジェクトの後も事あるごとに集まっていましたが、大変残念ながら、前川さんは2012年に急逝されました。不思議な縁ですが、前川さんのお墓は、私が単身赴任で今住んでいるところから走って約４キロのお寺にあります。日々のランニングコースに入れて、時々立ち寄って墓前に手を合わせています。

繋がりといえば、違う話もあります。2005年12月に環太平洋国際化学会議（ホノルル）へ参加する時、一緒に連れて行った家族と空港国際便の出発ロビーで搭乗を待っていたのですが、キッズスペースで長男（当時２歳）ととても仲良くなった同じ年頃の女の子がいました。初対面かつこんなに短時間のうちに、仲良くなることもあるんだな…と微笑ましく眺めていましたが、後でその女の子のお父さんを発見してびっくり！　なんと、菅敏幸さん（化学56期、故人）でした。お互

い同じ驚きだったようで、北大理学部化学科の繋がりは世代を越えるのか…と苦笑いでした。菅さんには生前、色々お世話になりましたし、このリレー寄稿も菅さんからの繋がりです。実は、前述の前川さんも菅さんと大の親友でした。本当に惜しい先輩達を亡くしました。まだ菅さんの墓前にお参りできていませんが、この間、前川さんの墓前に缶コーヒーを２つ置いてきました。

ちょっと違う話もさせて頂こうと思います。私は現在、異なるタンパク質同士を「繋げる」有機分子の設計・合成を一つの研究テーマとしています。原子や分子を「繋げる」のは、化学の特権であり醍醐味ですが、我々や製薬業界が注目しているのは、異なるタンパク質を繋げる「標的タンパク質分解誘導剤」と呼ばれる有機分子です。一方、この分子に上手く繋げられたタンパク質は、真核細胞内の機構により、バラバラに分解されてしまいます。疾患の原因となるタンパク質なので良いのですが、上手く繋がったものほど断ち切られてしまう…何か皮肉な話です。

現在は、世界中で社会や人種、国家間の分断が進み、数年前には考えられなかった状況に陥りつつあります。シームレスに何とでも「繋がる」ことが良しとされていた世界は、少しずつ逆の方向（＝繋がらない）に向かっており、コロナ禍やロシアの軍事侵攻がそれに拍車をかけています。インターネットの世界でも、通信事業者が特定の国への回線を遮断するという出来事（スプリンターネット）が起きています。私達は大学人ですので、世界中の研究者や友達とのネットワークを通して、分断や断絶に陥らないよう、草の根の努力をしなければならないと思っています。

こんなことを考えながら、この間、夜中に目黒通りを走っていたら、すれ違った見知らぬ青年からいきなり「ナイスラン！」と声を掛けられました。ちょっと驚きましたが、コロナ禍で遮断されていた、こういう出会いも良いものです。走るモチベーションも上がります。

長くなりましたが、私の番はここまでということで、同窓生の皆様のご健勝と、化学同窓会の発展を祈念しつつ、バトンを次の方にお渡しします。次は、前述の西澤精一さんです。お願いするメールのやり取りの際、ひょんなことから化学同窓会での２人の共通点を発見しました。西澤さん、余裕があれば次の回で説明をお願いします（勿論、無視して頂いても結構です）。